



Title	「理解」のメタファー：認知言語学的分析
Author(s)	鍋島, 弘治朗
Citation	大阪大学言語文化学. 2004, 13, p. 99-116
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77930
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「理解」のメタファー －認知言語学的分析－*

鍋島弘治朗**

キーワード：メタファー、理解、認知言語学

This paper deals with metaphors for *understanding*, mainly in Japanese. The framework to be used here is metaphor theory in the Cognitive Linguistics (Lakoff and Johnson, 1980, Lakoff, 1987, Lakoff and Turner, 1989, Grady *et al.*, 1996, Grady, 1997a, Grady, 1997b, Lakoff and Johnson 1999, Kövecses, 2002). There are three representative metaphors for *understanding* in Japanese, which are listed below.

Understanding Is Seeing

Understanding Is Grasping

Understanding Is Digesting

This paper describes Japanese metaphors for understanding with rich linguistic data and claims that the concept of inheritance will help capture metaphors at a deeper level. In addition, the distinction between “strict” polysemy and “loose” polysemy is further exemplified in this paper.

1. 序 論

1.1 本稿の趣旨

本稿では、認知言語学のメタファー的分析手法 (Lakoff and Johnson, 1980, Lakoff, 1987, Lakoff and Turner, 1989, Grady *et al.*, 1996, Grady, 1997a, Grady, 1997b, Lakoff and Johnson, 1999, Kövecses, 2002) に基づいて、日本語を中心に「理解」のメタファーについて検討する。「理解」に関する日本語の中心的なメタファーとしては、以下の三種類が挙げられる¹⁾。

* Metaphors for *Understanding*: From a Cognitive Linguistic Perspective (NABESHIMA Kojiro)

** 関西大学

《理解することは見ることである》

《理解することはつかむことである》

《理解することは消化することである》

本稿では、主に日本語の「理解」のメタファーを記述するとともに、メタファーの継承という概念を利用することによって、より根源的なメタファーが捉えられることを主張する。加えて、鍋島 (2001a) で行った厳密な多義と緩やかな多義という区分を例証する。

1.2 厳密な多義と緩やかな多義

比喩の多義は、物理的で具体的な領域と抽象的な領域にまたがった多義となるわけだが、場合によっては、すでに物理領域で使用ができなくなっていることがある。以下の例で見ると、「つかむ」は今でも両義的に使えるので厳密な多義であるが、「把握する」の方は、つかむ意味があると思われるものの、起点領域の「物理的につかむ」意味が失われているので、「緩やかな多義」と呼ぶことにする。

- (1) a. 石をつかむ
 b. 意味をつかむ ← 厳密な多義

- (2) a. *石を把握する
 b. 意味を把握する ← 緩やかな多義

1.3 本稿の構成

本稿では、本第1節の後、第2節で認知言語学におけるメタファー理論と論証法を検討する。第3節では、理解のメタファーの検討に入る。事前準備として、理解領域に関して概観し、さらに、理解者のメタファー、理解しやすさのメタファーに目を向ける。第4節では、理解に関する日本語のメタファーをひとつずつ記述する。第5節では、第4節のデータを踏まえて、これらのメタファーの背景にある認知を、継承という概念を用いて整理する。第6節はまとめと結論である。

¹⁾ 山梨 (2000) では、光のモデル、分解のモデル、把握のモデル、着地のモデルの4種類が、瀬戸 (1995) では、(一) 明るいこと (二) 区別がつくこと (三) 目立つこと (四) 見通せること (五) 覆われていないこと (六) 手に取れること (七) 一定の形をなしていること、の7種類が概略的に挙げられている。

2. 認知言語学におけるメタファー理論

本小節では、認知言語学におけるメタファー理論を概観する。2. 1では、メタファー理論の用語を取り扱う。2. 2ではメタファー理論の論証法を取り扱う。

2. 1 メタファー理論の用語

メタファーの例として以下のようなものが挙げられる。

《怒りは火である》 ANGER IS FIRE

《愛情は暖かさである》 AFFECTION IS WARMTH

《理解することは見ることである》 UNDERSTANDING IS SEEING

《感情是水である》 EMOTION IS WATER

このようなメタファーでは、二つの異なる概念、すなわち、メタファーの用語では領域 (domain) が結びつけられていることがわかる。また、「怒り」「愛情」「理解」「感情」はどちらかといえば抽象的で把握しにくく、それぞれ対応する「火」「暖かさ」「見ること」「水」の方が具象的でわかりやすい。

すなわち、これらの領域は非対称的である。この場合、喩えられる抽象的な領域を Target Domain (目標領域)、喩える具象的な領域を Source Domain (起点領域) と呼ぶ。表記は以下になる。

TARGET domain IS SOURCE domain

《目標領域は起点領域である》

英語の UNDERSTANDING IS SEEING メタファーを例にとると、下線の用語が視覚領域と理解領域で多義となっている。

- (3) a. I see what you're saying.
 b. It looks different from my point of view.
 c. What is your outlook on that?
 d. I view it differently.
 e. Now I've got the whole picture.
 f. Let me point something out to you.
 g. That's an insightful idea.

- h. That was a brilliant remark.
- i. The argument is clear.
- j. It was murky discussion.
- k. Could you elucidate your remarks?
- l. It's a transparent argument.
- m. The discussion was opaque.

(3)は「視覚」の用語が頻繁に「理解」の用語に使用されていることを示している。つまり、それぞれの用語は多義 (polysemy) を示している。また、「clear なものは見やすい」「光を当てると見やすくなる」など視覚領域に関する知識は、理解領域の解釈にも利用される。これを推論 (inference) と呼ぶ。用語や推論が、視覚領域と理解領域で対応関係にあることを写像 (mapping) と呼ぶ。

2.2 メタファーの論証法

メタファーの存在の関しては、Lakoff and Johnson (1999) に過去の研究として、9種類が上げられている。なお、aの推論、bの多義はそれぞれ2.1節で述べた意味であり、「慣習化されていない例」とは聞いたことがない例を作例してもメタファーが理解できることを指す。

収斂する証左 (Lakoff and Johnson, 1999 pp.81-90)

- a. Inference generalizations (推論による証左)
- b. Polysemy generalizations (多義による証左)
- c. Novel-case generalizations (慣習化されていない例による証左)
-
- d. Psychological experiments (心理実験による証左)
- e. Historical evidence (歴史言語学による証左)
- f. Spontaneous gesture studies (ジェスチャーによる証左)
- g. Language acquisition studies (言語習得による証左)
- h. Sign language metaphor studies (手話による証左)
- i. Discourse coherence studies (談話の一貫性による証左)

これらはメタファーの存在を確かめる際の論証法として考えることもできる。本稿で

は、共時的証左として、a, b, c を用いる。

3. 理解領域の考察

さて、ここで、目標領域である理解領域に関して素朴な考察を行う。「理解する」とはどのようなことなのか。3.1 では、理解と記憶および受容の関係について論じる。3.2 では、理解領域をフレーム構造として記述する。3.3 と 3.4 では、理解自体のメタファーに入る前に、理解力に関するメタファーと理解しやすさに関するメタファーを考察する。

3.1 理解と記憶および受容

理解することと記憶することは同一ではない。それは(4)のような例からわかる。しかし、(5)のような例では、理解したことが保持されている、すなわち記憶されていると考えるのが自然である。

(4) 理解したけどすぐ忘れた

(5) A: わかった? B: うん、わかった

また、理解と受容も似た概念である。(6)や(7)のように述べた場合、単に理解の有無というだけでなく、対象を是認するかどうかと連続している。

(6) 深い理解を示す

(7) あなたは私のことをよく理解してくれている

一方、(8)のように言えることから、必ずしも全く同じ概念ではない。

(8) 理解したけど同意できない

3.2 理解領域のフレーム構造

理解領域に関与するのは、二つの要素、すなわち、理解するヒト(ここでは Understan-der と表記)および理解されるコト(ここでは Understandee と表記)であり、Understan-der から Understandee に対する何らかの行為が働くものと考えることができる。なお、フレームは Fillmore (1977, 1982), Fillmore and Atkinson (1992) などの用語として用いる。

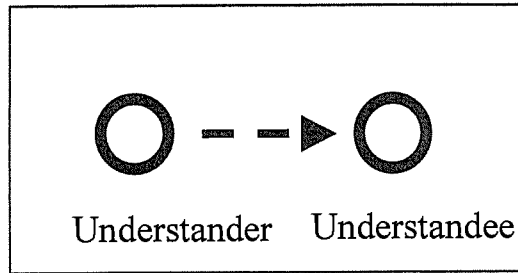


図1. 理解領域のフレーム構造（概略）

理解領域に関するフレーム構造を命題で例示すると以下のようになる（～は取りうる範囲とする）。

Understanderの属性	理解能力がある～理解能力がない	
Understandeeの属性	簡単～難しい	など

3.3と3.4にそれぞれの属性がどのように概念化されているか簡単に確認する。

3.3 理解力に関するメタファー

一般に、理解が優れている人に対して(9)のような表現が用いられる。

- (9) a. あの人には物事をよく理解する力がある
- b. あの人は知識をよく吸収する
- c. あの人は思考が柔軟だ
- d. あの人は頭の回転が速い

すなわち、理解は能力のひとつと捉えられており、柔軟な人がよく知識を取り入れることができる。また理解はある種のプロセスと考えられておりプロセスには処理速度も関連する。

3.4 理解しやすさと理解しにくさのメタファー

ここで、「理解しやすさ」と「理解しにくさ」のメタファーに関して少し考察する。「理解しやすさ」は以下のような領域の概念で形成されているように思われる。また、これをまとめると(11)のようになる。

- (10) a. 中心／要点 (vs. 詳細、付記)
 b. 大枠 (vs. 詳細)
 c. 骨子 (vs. 肉付け)
 d. 根幹 (vs. 枝葉末節)
 f. はっきり (vs. あいまい)
 g. すっきりした (vs. こんがらがった)
 h. 丸めた (vs. 飾り立てた)
 i. ストレート (vs. 回りくどい)
- (11) a. 装飾を廃し、中心的なことを述べていれば述べているほどわかりやすい
 b. 明確であればあるほどわかりやすい
 c. 直線的であればあるほどわかりやすい

4. 日本語における理解のメタファー

本節では日本語における理解のメタファーを考察する。以下の日本語における理解のメタファーの代表的な3種類を順に概観していく。

《理解することは見ることである》

《理解することはつかむことである》

《理解することは消化することである》

4.1 《理解することは見ることである》メタファー

前節で英語の UNDERSTANDING IS SEEING メタファーを概観したが、同様の表現が日本語でも見られる。今後の考察に関連するため、()内には実際の物理的領域で使われる表現を入れて、これらの表現が「厳密な多義」(起点領域でも目標領域でもそのまま使用できる)なのか、「緩やかな多義」(目標領域のみで使用可能)なのか区別できるようにする。

4.1.1 《理解することは見ることである》メタファーの多義

- (12) この訴訟では Sun が勝利を収めると見られている (喫茶店に入ったところを見られている)
 (13) ～との見方を示し、 (フットボールの見方を示す)

- (14) 話が見えない (港が見えない)
- (15) この問題に光／スポットライトを当て (その観葉植物に光／スポットライトを当て)
- (16) 問題点が浮かび上がる (夜景が浮かび上がる)
- (17) この問題に焦点を絞る (あのタワーに(カメラの)焦点を絞る)
- (18) 問題点がはっきりと見える (港がはっきりと見える)
- (19) 不透明な行政プロセス (不透明な水槽)
- (20) 視点を変えれば、問題がさらに見えてくる (視点を変えれば塔がさらに見えてくる)
- (21) 問題を見逃さないように (隠れた塔を見逃さないように)
- (22) 問題を闇に葬る (?死体を闇に葬る)
- (23) 問題の所在を明らかにする。 (*港を／塔を／漁船を明らかにする)
- (24) この問題に対する明確な理解 ((?) 隣の敷地との明確な境界線)
- (25) ～ということを暗にほのめかした (横顔を(暗闇に／*暗に)ほのめかした)
- (26) ～ということを明示的に伝えた (*財布を明示的に渡した)
- (27) うっすらとわかり始めてきた。 (うっすらと月が見えてきた)
- (28) おぼろげながら相場が見え出した。 (月がおぼろげながら見えてきた)
- <http://www2r.biglobe.ne.jp/keiei/bbsevery/453841806463064.html>
- (29) 年のせいで酒に弱くなりつつある自分、そしてただの酔っぱらいになりつつある自分を弁護しなかったんだらうなあ、ということはぼんやりとわかる。
- <http://www.ishinao.net/ruins/text/01.htm> (月の姿はまだぼんやりとしたままである)
- (30) まだ、問題の全体像が見えない (塔の全体像が見えない)

4. 1. 2 《理解することは見ることである》メタファーのフレーム構造

視覚領域の構造を概略で表すと以下のようなになる。

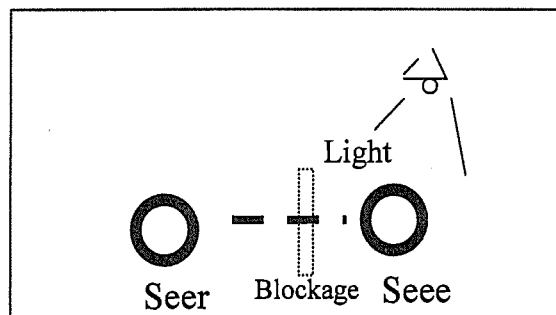


図2. 視覚領域のフレーム構造 (概略)

見る関係には主要な要素が2つ存在する。「見る人（仮に Seer と呼ぶ）」と「見られるもの（仮に See と呼ぶ）」である。これに外部環境によって状況が多少変わってくる。「障害物（仮に Blockage と呼ぶ）」がある場合は見にくい。「光源（仮に Light と呼ぶ）」が存在する場合には見やすい。それぞれの参与者には属性が付随している。

See の属性	ハッキリしている～ぼんやりしている	
Blockage の属性	透明～不透明	
Light の属性	明るい～暗い	
Seer の属性	近い～遠い、角度、フォーカス	など

《理解することは見ることである》メタファーにおける写像は、Understander に Seer を写像し、Understandee に See を写像する。さらに、理解領域に存在しない、Blockage, Light などの要素を写像する場合もでてくる。誤解を恐れずに単純化して述べれば、メタファーとは、図1と図2の重ね合わせと考えてよい。

4. 1. 3 《理解することは見ることである》メタファーの推論

それぞれの要素と行為の間に、視覚領域特有の関係（推論）が存在する。これらは、我々が日常、「ものを見る」という経験から獲得した知識である。

- (31) a. 大きい程、よく見える
- b. 鮮明な程、よく見える
- c. 全体的な程、よく見える
- d. 見る場所によって、見え方が変わる
- e. 近い程、大きく見える
- f. 回りが明るい程、鮮明に見える
- g. 焦点を絞る程、鮮明に見える

4. 1. 4 《理解することは見ることである》メタファーの慣習化されていない例

さらに、Lakoff and Johnson (1999) の記述に従って、共時的証左として、新しい例が作例可能かどうか検討して見る。

- (32) a. 田中さんのご説明は、問題に新しい光を投げ、重要な点をくっきりと浮かび上がらせてくださいました

- b. 彼女のいいなかったことは僕にとっていまだ深い霧に包まれている。その霧が晴れるのはいつの日だろう
- c. 近づくだけでなく、時には離れて見ることによって、問題の所在がハッキリと見えてくることもある

つまり、作例も充分理解可能であり、《理解することは見ることである》というメタファーの存在が裏付けられたと言える。

4.2 《理解することはつかむことである》メタファー

次に《理解することはつかむことである》メタファーに関して論じる。このメタファーには以下のような用例が存在する。

4.2.1 《理解することはつかむことである》メタファーの多義

- (33) さっき言ったこと、変な風に取らないでね (さっきの財布、絶対取らないでね)
- (34) 意味をしっかりと掴むことが重要だ (綱渡りでは、綱をしっかりと掴むことが重要だ)
- (35) その問題を家庭内の問題と捉えることには、異議がある (? 犯人を捉える)
- (36) つまり、「御流れ頂戴」の文化か、それとも“おひとつどうぞ”の文化かそれを押さなければ本質がつかめない」ということである。

<http://www.thinktank-fukushima.or.jp/ttf/news/news0304.html>

(弦をしっかりと押さえるように) (つり革が掴めない)

4.2.2 《理解することはつかむことである》メタファーのフレーム構造

このメタファーの起点領域のフレーム構造を概略で記述すると以下ようになる。

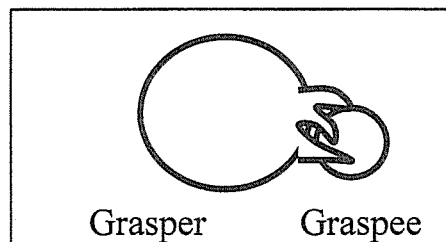


図3. 把握領域のフレーム構造 (概略)

把握領域には掴むもの (Grasper と表記) と掴まれるもの (Graspee と表記) が存在する。Grasper と Graspee は接している。Grasper から Graspee に典型的には手や指など多面的な力が加えられており、この力によって Graspee は Grasper に近い位置に保持されている。把握領域のフレーム構造を文字で記述すると以下のようになる。

Graspee の属性	固い～柔らかい	滑りやすい～滑りにくい
Grasper の属性	力が強い～力が弱い	
Process の属性	長時間～短時間	など

4. 2. 3 《理解することはつかむことである》メタファーの推論

いうまでもないことであるが、把握領域を起点領域とした理解メタファーでは視覚領域を起点領域とした理解メタファーと異なる推論が働く。推論としては、Grasper の属性、Graspee の属性に関する推論以外に、理解から理解の保持に関する推論が持ち込まれることになる。

(37) a. しっかり持つ程、長時間離れにくい。

b. 近い程、離れにくい

4. 2. 4 《理解することはつかむことである》メタファーの慣習化されていない例

(38) a. その教義は、掬っても掬っても手の隙間からこぼれ落ちてしまう

b. 理解できる瞬間があったら、そのとき、しっかりつかんで絶対離さないように

c. 言っていることが最初はつかめなくても、次第に、意味の方から勝手に入ってくるようになるさ

(38)のような表現はややぎこちないが不可能ではなく、Lakoff and Johnson (1999) メタファーの証左の点からもこのメタファーの存在が裏付けられたことになる。

4. 3 《理解することは消化することである》

最後に《理解することは消化することである》メタファーに関して論じる。このメタファーには以下のような用例が存在する。

4.3.1 《理解することは消化することである》の多義

(39) 咀嚼する (赤ちゃんは咀嚼する力が弱い)

(40) かみ砕いて説明してくれ (固いチョコレートをかみ砕いた)

(41) 中内さんの哲学が現場で十分消化し切れていないのでは。

<http://www.umds.ac.jp/jim/memory/html/sonota/9-20.htm> (ステーキがまだ消化し切れていない)

(42) システムの知識は、日常業務を通して吸収していくことができます。しかし、経理に関する法規等は、自発的に吸収していかなければ、身につきません。

<http://www.dia-systems.co.jp/ob/o01.html> (その紙は水をどんどん吸収していく)

4.3.2 《理解することは消化することである》メタファーのフレーム構造

このメタファーの起点領域のフレーム構造を概略で記述すると以下ようになる。

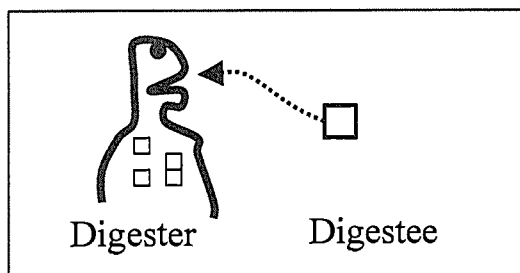


図4. 消化領域のフレーム構造 (概略)

食べ物などは、典型的に口から摂取され、口の中にかみ砕かれたのち、唾液や胃液で消化され、吸収され体の一部となる。

Digester の属性 消化する力が強い～消化する力が弱い

Digestee の属性 消化しやすい～消化しにくい、量が多い～用が少ない

消化に関するプロセス 手に取る→口に入れる→嚙む→消化する→吸収される

4.3.3 《理解することは消化することである》メタファーの推論

消化メタファーには視覚メタファーや把握メタファーとは異なる推論が働く。そこには、摂取から咀嚼、消化、吸収というプロセスが生じる。

- (43) a. 噛むことは消化を助けることである
- b. 細かく分断されたものは消化しやすい
- c. 消化されたものは吸収される

4. 3. 4 《理解することは消化することである》メタファーの慣習化されていない例

- (44) a. この数学の理論はなかなか歯ごたえがあって消化にも時間がかかりそうだ
- b. 今日の講義の内容は量も多くてなかなか腹にもたれそうだ
- c. 先生のご講義はとてもわかりやすくて、すぐ体に吸収されて力になりそうです

以上、日本語における理解メタファーとして重要な、視覚メタファー、把握メタファー、消化メタファーを概観した。次節では、これ以外のデータを検討し、理解がどのように概念化されているか、継承の概念を利用して検討する。

5. 分析 —理解メタファーにおける継承—

継承の概念に関しては、鍋島・菊地（2003）に考察されているが、メタファーのカテゴリー関係である。「『下位メタファー』は『上位メタファー』を継承する」「『下位メタファー』は『上位メタファー』から継承を受ける」という表現で用いられる。4節でみたメタファーはより根源的なメタファーから継承を受けているのではないか。これを本節で検討する。

5. 1 理解と身体

《理解することは消化することである》メタファー以外に、体に取り入れることを表す理解表現は少なくない。

- (45) 頭に入る （部屋に入る）
- (46) その問題を、日本の危機管理への挑戦と受け取った （手紙を受け取った）
- (47) 意味がすんなりと入ってくる （蚊が入ってくる）
- (48) コンピュータの知識を身につける （宝飾品を身につける）

また、《理解は把握》メタファーも、「体に近くなり、自分と知識の一体感が増す」という点では、身体に取り入れることの一種と考えることができる。そこで、《理解は身体の一部にすることである》というメタファーを考えると、《理解は消化である》、《理解は

把握である》、および、(45)、(46)、(47)、(48)、のような表現もこのメタファーから継承を受けるといえる。

5.2 理解と感覚

《理解は把握である》メタファーはさらに、(49)、(50)のように、指が触覚の重要な器官であることから、触覚、すなわち感覚の一例として考えることもできる。

- (49) 首相は辞任するという感触を得る
- (50) 手探りで現在の状況の理解に努める

この他、感覚が理解を表すと思われる例としては、嗅覚に以下のようなものが挙げられる。

- (51) a. 事件の真相を嗅ぎ回る
- b. これはどうも殺人事件くさい
- c. アイドルの結婚話を嗅ぎつける
- d. 次の犯行としては今夜あたりが匂うな

聴覚表現、味覚表現はあまりなさそうだが、「(命令を) 聞く」という場合、理解を前提にしていることは疑いなかろう。一方、視覚以外の感覚の情報性は低く、「百聞は一見に如かず」「火を見るより明らか」など、視覚が理解の重要な感覚となっていることには疑いがない。以上をまとめて、概略図にすると図4のようになる。

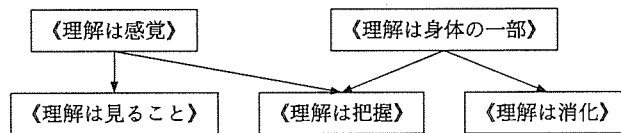


図4. 理解メタファーの継承関係に関する一提案

6. 結論

6.1 まとめ

本稿では、認知言語学のメタファー的分析手法 (Lakoff and Johnson, 1980, Lakoff 1987, Lakoff and Turner 1989, Grady *et al.* 1996, Grady, 1997 a, Grady 1997 b, Grady 1999, Lakoff and Johnson 1999, Kövecses, 2002) に基づいて、日本語の理解

メタファーについて検討した。「理解」に関する日本語の中心的なメタファーとしては、以下の三種類が挙げられた。

《理解することは見ることである》

《理解することはつかむことである》

《理解することは消化することである》

第2節で、認知言語学におけるメタファー理論に触れた後、第3節で理解領域に関する考察を行った。さらに、第4節で、理解を目標領域とする代表的な以下のメタファーのデータを、多義、推論、作例可能性の3点から検証した。

さらに、第5節では第4節のデータをもとに、視覚メタファーを感覚メタファーに関連付けた。また、消化メタファーを「身体の一部とする」メタファーにその源があると考えた。さらに、両者はそれぞれからの継承であるという考え方を提案した。なお、把握メタファーは2つの継承を受けると考えられる。

結論としては、メタファーの継承を利用することによって、より根源的なメタファーが捉えられることを主張した。加えて、鍋島(2001a)で行った厳密な多義と緩やかな多義という区分を用例を拡げて例示した。

6.2 今後の方向性と残された課題

継承の概念はメタファー同士の関係を取り扱うものとして重要であるが、どのような場合に継承と認められるのか、継承されるもののメタファーの表記はどうすべきか、など今後、概念、用語、運用を厳格化していく必要がある。

さらに、視覚、把握、消化に関する用語でも理解に関する意味を持ち得ないものもある。このような表現の生産性の問題も考慮すべきである。

主要参考文献

- Clausner, Timothy and William Croft. 1999. Domains and image schemas. *Cognitive Linguistics* 10-1, pp.1-31.
- Fillmore, Charles. 1977. "Scenes-and frames semantics." In Zampolli, A. ed. *Linguistic structures processing*. Amsterdam: North-Holland Publishing.
- 1982. Frame semantics. In The Linguistic Society of Korea ed., *Linguistics in the morning calm*. Seoul: Hanshin Publishing.
- Fillmore, Charles and Beryl T. Atkins. 1992. Toward a frame-based lexicon: The

- semantics of RISK and its neighbor. In Lehrer, Adrienne and Eva Feder Kittay eds., *Frame, fields, and contrasts: New essays in semantic and lexical organization*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Glucksberg, Sam and Boaz Keysar. 1993. How metaphors work. In Ortony, A. ed. *Metaphor and thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grady, Joe. 1997a. THEORIES ARE BUILDINGS revisited. *Cognitive Linguistics* 8(4), 267-290.
- 1997 b. Foundations of meaning: primary metaphors and primary scenes. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Grady, Joe, Sarah Taub, and Pamela Morgan. 1996. Primitive and compound metaphors. In *Goldberg ed. Conceptual structure, discourse and language*. Stanford: CSLI publications.
- Johnson, Mark. 1987. *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kövecses, Zoltán. 2002. *Metaphor: A practical introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦、河上誓作他訳 『認知意味論—言語から見た人間の心』, 紀伊国屋書店, 1993 年)
- 1989. The death of dead metaphor. *Metaphor and Symbolic Activity*, 2(2), 143-147.
- 1990. The Invariance hypothesis: Is abstract reason based on image schemas? *Cognitive Linguistics* 1, 39-74. (杉本孝司訳 「不変性仮説—抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか?」 坂原茂編 『認知言語学的发展』, ひつじ書房, 2000 年)
- 1993. The contemporary theory of metaphor. In Ortony, A. ed. *Metaphor and thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 1996. *Moral politics. -What conservatives know and liberals don't*. Chicago: The University of Chicago Press. (小林良彰・鍋島弘治朗訳 1998. 『比喩によるモラルと政治』 木鐸社)
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- 1999. *Philosophy in the flesh*. New York: Basic Books

- Lakoff, George and Mark Turner. 1989. *More than cool reason: a field guide to poetic metaphor*. Chicago: University of Chicago Press. (大堀俊夫訳 『詩と認知』, 紀伊国屋書店, 1994 年)
- Langacker, Ronald 1987. *Foundations of cognitive grammar. Vol.1: Theoretical prerequisites*. Stanford, Calif.: Stanford University Press.
- Nomura, Masahiro. 1996. "The ubiquity of the fluid metaphor in Japanese: a case study", *Poetica*, 46.
- Sweetser, Eve. 1990. *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard. 2000. *Cognitive Semantics, Volume I: Concept Structuring Systems*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Traugott, Elizabeth C. 1985. 'Conventional' and 'Dead' Metaphors Revisited. In Paprotte and Dirven, *The ubiquity of metaphor*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Co.
- Turner, Mark. 1991. *Reading minds: The study of English in the age of cognitive science*. Princeton: Princeton University Press.
- Ungerer, F. and H. J. Schmid. 1996. *An Introduction to cognitive linguistics*. London & New York: Longman. (池上嘉彦他訳 『認知言語学入門』, 大修館書店, 1993 年)
- 荒川洋平 1999. 「パーソナル・コンピュータの名称における隠喩の分析」『獨協大学諸学研究』第2巻第2号
- 笠貫葉子 2002. 「複合的比喩の認知的基盤」『Proceedings of the 26 th Annual Meeting』関西言語学会
- 河上誓作 編著 1996. 『認知言語学の基礎』研究社出版
- 谷口一美 2003. 『認知意味論の新展開：メタファーとメトニミー』(英語学モノグラフシリーズ第20巻) 研究社出版
- 楠見 孝 1990. 「比喩理解の構造」 芳賀 純・子安増生(編) 『メタファーの心理学』 誠信書房
- 松本曜 2000. 「日本語における身体部位詞から物体部分詞への比喩的拡張—その性質と制約」坂原茂編 『認知言語学の発展』, pp.317-346, ひつじ書房
- 榎山洋介 1995. 「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際—意味転用の一方向性：空間から時間へ—」『東京大学言語学論集』14, 621-639.
- 鍋島弘治朗 2001a. 「『悪に手を染める』—比喩的に価値領域を形成する諸概念」『大阪大

学言語文化学 10】

- 2001b, 「『可能性』はなぜ『薄い』のかー比喩の合成と衝突が生産性を抑圧する場合」
『Proceedings of the 25 Annual Meeting』
- 2002a, 「Causation(使役／因果)の概念化ー認知メタファー理論の視点からー」『文学論集』第52巻 第2号 関西大学文学会
- 2002b, 「Generic is Specific はメタファーかー慣用句の理解モデルによる検証ー」
『Proceedings of the 2nd JCLA Annual Meeting』認知言語学会
- 2002c, 「政治を動かすメタファー」『言語』2002年7月号 大修館書店
- 2002d, メタファーの身体性基盤について 人工知能学会ことば工学研究会資料, 第
SIG-LSE-A 202 巻
- 2003a, 「『希望』の概念化ー認知メタファー理論の視点からー」『英文学論集』関西
大学文学会
- 2003b, 特集: 認知言語学のフロンティア 認知意味論ーパークレー、ヨーロッパの
メタファー研究を中心に『英語青年』第148巻第11号, pp.676-679.
- 2003c, 「メタファーと意味の構造的性」『認知言語学論考 No.2』, ひつじ書房.
- 2003d, 「領域を結ぶのは何かーメタファー理論における価値的類似性と構造的類
似性ー」『Proceedings of the 3rd JCLA Annual Meeting』認知言語学会
鍋島弘治朗・菊地敦子 2003, 「『問題』の概念化ー認知メタファー理論の視点からー」
『文学論集』第53巻 第2号 関西大学文学会
- 西村義樹 2000, 「対照研究への認知言語学的アプローチ」坂原茂編『認知言語学の発展』,
pp.145-166, ひつじ書房
- 大堀壽夫 2002, 『認知言語学』東京大学出版会
- 佐藤信夫 1978, 『レトリック感覚』講談社学術文庫
- 1981, 『レトリック認識』岩波書店
- 瀬戸賢一 1995, 『メタファー思考』講談社現代新書
- 篠原俊吾 2002, 「『悲しさ』『さびしさ』はどこにあるのかー形容詞の事態把握とその中
核をめぐる』西村義樹編『認知言語学Ⅰ: 事象構造』東京大学出版会
- 杉本孝司 1998, 『意味論<2> 認知意味論』くろしお出版
- 辻大介 1995, 「隠喩解釈の認知過程とコミュニケーション」『東京大学社会情報研究所
紀要』No.50.
- 辻幸夫 2002, 「メタファーの基本用語」『言語』(特集: メタファー) 31(8): 24-25.
- 山梨正明 1988, 『比喩と理解』東京大学出版会
- 2000, 『認知言語学原理』くろしお出版